統　計

技術貿易の動向（I）主要国の技術貿易

技術貿易は一国の技術水準・技術開発力と密接な関係があると考えられる.

昭和54年度の我が国の技術貿易は，日本銀行「国際収支統計月報」によれば，輸出(対価受取額)は750億円，前年度比30.0%増，輸入(対価支払額)は2762億円，前年度比5.7%増となつている．この結果，技術貿易収支比（輸出/輸入）は27.1%となり，前年度より5.0ポイント増加している.

主要国における技術貿易の推移を比較したのが下表である．昭和52年で比較すると，技術輸出では米国の1兆2687億円が圧倒的に大きいが，技術輸入では各国間にそれほどの開きはない．技術貿易収支比では米国が10.57で第1位，次いでフランス1.43，イギリス1.02（昭和50年），西ドイツと日本はそれぞれ0.41，0.27(54年)で入超となつている.

主要国における技術貿易額の推移

(単位：億円)

年＼国名	日本			米国			イギリス			西ドイツ			フランス		
項	受取A	支払B	A/B	受取A	支払B	A/B	受取A	支払B	A/B	受取A	支払B	A/B	受取A	支払B	A/B
40 ('65)	62	600	0.10	5,545	488	11.36	499	472	1.06	272	599	0.45	610	776	0.79
41 ('66)	69	696	0.10	5,490	507	10.82	610	519	1.18	266	635	0.42	657	885	0.74
42 ('67)	98	866	0.11	6,328	601	10.52	662	629	1.05	326	698	0.47	707	835	0.85
43 ('68)	123	1,132	0.11	6,732	671	10.04	761	703	1.08	356	789	0.45	972	1,016	0.96
44 ('69)	165	1,319	0.13	7,236	792	9.14	783	799	0.98	352	916	0.38	1,203	1,190	1.01
45 ('70)	211	1,551	0.14	8,350	806	10.36	978	913	1.07	426	1,096	0.39	1,232	1,277	0.96
46 ('71)	209	1,703	0.12	8,880	841	10.56	1,005	941	1.07	519	1,315	0.39	1,389	1,631	0.85
47 ('72)	228	1,762	0.13	8,532	906	9.42	1,043	945	1.10	619	1,335	0.46	1,801	1,809	1.00
48 ('73)	240	1,946	0.12	8,779	1,048	8.38	1,115	953	1.17	587	1,466	0.40	2,273	2,018	1.13
49 ('74)	329	2,093	0.16	11,138	1,009	11.04	1,355	1,205	1.12	764	1,697	0.45	2,857	2,398	1.19
50 ('75)	478	2,113	0.23	12,762	1,404	9.09	1,463	1,437	1.02	913	2,163	0.42	3,898	3,072	1.27
51 ('76)	513	2,509	0.20	12,911	1,430	9.03	—	—	—	857	2,053	0.42	4,262	3,500	1.22
52 ('77)	626	2,758	0.23	12,687	1,200	10.57	—	—	—	900	2,192	0.41	4,768	3,328	1.43
53 ('78)	577	2,612	0.22	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
54 ('79)	750	2,762	0.27	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

編集後記

▶編集委員を拝命してから早くも10年になり，時にまんねりになりながらも，毎号毎号ができあがります．この間日本の鉄鋼業の隆昌とも相まつて，本誌の論文は充実し，報数もだんだん多くなりました．特にここ数年は誌面をより興味深くするために，多くの新企画を出しながら皆様にお届けしている次第です.

しかし一歩下つて振り返つてみるとき，これでよいのかという気がいたします．新しい記事を増しながらも，論文の占めるページは減るどころか，増加の一途をたどつており，鉄と鋼の目方はどんどん増えていきます．他学会で財政上の問題から紙面を圧縮する努力が払われているという話を聞くにつけても，鉄と鋼誌だけはパーキンソンの原理そのままに増加するだけでよいのかどうか反省されます．理事会でも編集・発行費の増大が問題になつております.

昨年論文のページ制限を10ページから8ページに縮少したらとの議論があり，討議はかなり白熱しましたが，内容の冗長なところをできるだけ圧縮する努力をしたら，最大10ページの論文があつてもよいということに落ち付きました．編集委員として，10ページ以上の論文を10ページにすることは，かなり強引に実施しておりますが，10ページ以内の論文のぜい肉を落すことは，投稿者の強力な反撃に会い，なかなかうまく行きません．10ページは投稿者の権利であるという意識が強いように思われます．ひるがえつて自分の書いた文章を印刷後読み直してみると，汗顔の至りです．論文の制限は経済の許す限り，しばらくは10ページと致しますが，編集委員としてはできるだけ簡潔な文章になるように努力いたしますので，1万部印刷される公共のスペースということをお考えのうえ，編集よりそのような指摘を受けないときは，10ページを投稿者の権利と思われず，できるだけ会誌の有効利用に御協力をお願いする次第です.　(T. S.)